

<http://outdoor.geocities.jp/tokinosunomori>

E-mail : tokinosunomori@yahoo.co.jp

<連絡先> 掛川市中宿 1 1 3 (TEL・FAX 0537-23-0412) 「森の駅 時ノ寿」(TEL 0537-28-0082)

<もくじ>

★ごあいさつ	1
★最近の活動報告（時ノ寿ホームページ・ブログより）	
植樹祭成功	2
エネルギー政策を本気に考えるとき	2
イマドキの若者	3
豊島区で伝統的木造構法をPR	4
人心とは	5
森林こそ日本が誇る再生可能エネルギー	6
いのちの鼓動	6
組織は人心なり	7
政治家よ！被災地の子どもたちに恥ずかしくないか	8
NPOと寄付	9
歴史的な半年に思う	9
★7～9月クラブ活動予定	別紙
★「会員限定陶芸教室」ご案内チラシ	別紙
★「宮脇昭と巡る鎮守の森ツアー」ご案内チラシ	別紙
★「森の夕涼みバーベキュー&親睦お泊り会」ご案内チラシ	別紙

<ごあいさつ>

今年の夏も、人類が自ら招いた気象変動によって未曾有の猛暑を体験しなくてはなりません。同時に我が国の現代人にとっては初の「電力使用制限」を体験しなければなりません。政府も企業も国民も自然に対する謙虚さを忘れ、便利と効率のみを求めてきましたが、3月11日の東日本大震災により途方もなく尊い犠牲を払い、すべての者に対して今までの歩みへの猛省が促されたと思います。

NPO法人時ノ寿の森クラブは、7月1日現在個人会員118人・法人会員3人の入会をいただきました。「近者悦ばば 遠者来る」の理念で、会員相互が森林と共生する文化を楽しみながら、未来の子どもたちにとってかけがえのない「ふるさとの森林」を保全していきたいと考えています。ご多用のことと存じますが、ご都合のよいときで結構ですので、

気兼ねなく時ノ寿の森を楽しみにお越しください。

<最近の活動報告> (時ノ寿ホームページ・ブログより)

2011年4月30日(土)

植樹祭大成功

好天に恵まれ、地元の皆様をはじめ市内外から、遠くは山口県、神戸市、東京、神奈川からも「いのちの森づくり」に共鳴くださった多数の方々が参加くださいました。私たちスタッフを含むと350人の盛大な植樹祭となりました。



今回は、障害をお持ちのお子さんや青年たちを御招待したところ、重度障害のお子様を含む60名もの障害者が参加くださいました。心に木を植えるという言葉がありますが、まさに今日の障害者の植樹の姿を見ていたらその言葉を思い出しました。重度障害で、車いすから降りられず、そして言葉も容易でないお嬢さんが、お母さん・お父さんの手に託して植えられている光景には感動しました。きっと、暑い夏も耐え抜いて苗木も育てて行ってくれるに違いありません。

宮脇昭先生は、東北の被災地を一昨日まで調査されて来られ、三陸海岸一帯も土地本来の親分の木である「タブノキ」は立派に立っていたと、先生が進めて来られた「本物の森づくり」の重要性を確信され、次の氷河期まで9000年も残る木を植えなければいけないとおっしゃいました。

大震災被災地の皆様は、植樹どころではない状況でしょうが、未来のために、そして希望を見出すために「植樹」が大切だと思います。私たちの植樹活動への情熱が、被災地の皆様の希望につながることを信じています。本日の植樹にご参加くださいました皆様、そして裏方に徹して準備から片付けまでご支援いただいたクラブ会員の皆様に心から感謝申し上げます。

宮脇昭先生から、本物の森づくりも3年くらいは誰も続くけれども、そこから先が続かない。掛川市の時ノ寿の森クラブは、来年も必ず続けてください、と激励されました。先生の期待に沿いたいと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。

2011年5月11日(水)

エネルギー政策を本気に考えるとき

福島第一原発事故により避難を強いられていた警戒区域内の住民の皆さんの一時帰宅が始まりました。ふるさとの我が家



に戻ることができたといっても、わずか2時間で我が家を去らなければならず、また家族同然に暮らしていた家畜の生存すら確認できずに、ふるさとを後にせざるを得ない住民のみなさんのつらい心情は、想像するに値しません。このような結果に陥ったことは、国策として原発を進めてきた政府にも大きな責任があると、首相自らが国民に謝罪をされ、さらには原子力発電に依存する政府のエネルギー基本計画を、白紙に戻して議論すると、表明されました。

切迫している東海地震の想定震源域直下にある浜岡原発のみが、国の要請で全面停止することになりましたが、全国の原発立地自治体からの強い疑問、全面停止によって地域経済への大きな影響が避けられない静岡県御前崎市の首長や住民の賛否両論の意見など、原発を推進してきた国策の変更は、原発関係地域に大きな世論を巻き起こしています。

国の性急な方向転換により、地域経済が破綻してしまうようなことは許されません。しかし、今も原発事故によって無慈悲な避難生活を強いられ、死と隣り合わせの過酷な作業に寝食を忘れてあたられている皆さんのことを、関係地域の自治体や住民、関係者だけでなく、広く国民皆が我が事と思い、未来の子どもたちの為に本気に考えなければならないと真剣に思います。

そのことはもちろん、自分自信の選択肢によっては自分自身の生活や職業に対して大きなリスクとして跳ね返ってくることは承知しなければなりません。しかし、狭い国土の我が国において、すべての国民が安心して生活できるエネルギー政策を進めるには、政府のみに判断を任せるのではなく、国民一人ひとりもエネルギー政策に参画するスタンスが大切だと思います。今こそ日本は、デンマークが取った国民総参加によるエネルギー自給政策を見習う時であると思います。

私たちNPO時ノ寿の森クラブは、この考え方に立ち、日本の伝統的な森林と共生する文化の正しさを確信するとともに、今までの森林再生活動・木材活用運動を一層強力に推し進めて行きたいと、思いを新たにいたしました。

2011年5月23日(月)

イマドキノ若者

今晚のNHK TVの大越キャスターが、3・11東日本大震災以降の社会の変化について、ヒューマンウォッチングで捉えたことを言っていた。その変化とは「自分のためから 誰かのために」である。今年4月新規採用の社員に「10年後の日本社会



は良くなるか？」というアンケートの結果は、良くなる54%・ならない46%だったそうだ。路上でのインタビューにも、多くの人が協力的に答えてくれたという。答えた若者の気持ちも、心温まるものばかりだ。キーワードは「自分ができること」「家族を大切に」「当たり前じゃない」「人と人とのつながり」「原発と節電」などなど。

イマドキノ若者こそ、未来を支える当事者だ。私たちのDNAに潜む「森と共生する文化」は、この若者たちの心を射止めるに事欠かないだろう。この若者たちに「森林の価値」を分かりやすく、そして熱意を持って説得していくことが、森林再生の成功の道ではないか。

2011年5月24日(火)

豊島区で伝統的木造構法をPR

毎日新聞社の「つながる森プロジェクト」は、東日本大震災を教訓として防災に力点を置いた植樹を全国で展開している。先月30日にわが時ノ寿の森クラブが実施した植樹が、その第一弾であったが、一昨日の日曜日に東京都豊島区で第三弾の植樹が開催された。我が国で一番人口密度が高い都心での植樹である。都心では、大地震による火災が心配だが、住宅地の一角の公園に本物の広葉樹の苗木を植え、住民が安心して避難できる森を造るのである。



わが時ノ寿の森クラブは、同植樹に清水副理事長以下5人の会員が参加した。参加の目的は、地震に強く、高温多湿に快適な日本の伝統的な構法による木造住宅を普及である。時ノ寿の森で生産された杉材で造った木組み模型を展示し、都会の人々に国産材の美しさ、匠の優れた技法を紹介した。

東日本大震災を契機に、国内の住宅各メーカーでは節電をキーワードにした「太陽光による自家発電住宅」を、都会の消費者向けに大々的に売り出している。宣伝によれば、最新の太陽光発電や給湯システムを備えた住宅は、天候に左右されることもなく家内で消費する電気や暖房、給湯を自足し、さらには1カ月あたり5万円も電力会社からリターンがあるという。しかし、そのようなシステムを導入するには1000万円もの設備投資が必要になる。

日本人の知恵で生まれた高温多湿かつ地震の国に適した持続可能な循環型住宅を選ぶか、それとも科学の塊の住宅を選ぶか。消費者が見学し、体感して選んでもらえるように、大手メーカーのような広報宣伝に力を入れなければならない。

2011年5月28日(土)

人心とは

わが静岡県掛川市には、その昔箱根峠や鈴鹿峠と列んで、東海道の三大難所として知られる小夜の中山がある。この地は、昔から歌枕としても読まれ、古今集などでも歌われている。鎌倉時代初期に西行法師が詠み、新古今和歌集に入れられている「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」の歌碑などがある。文学的センスはまったくない小生だが、西行が詠んだというこの歌だけは、空でも言える。恥ずかしながら、この歌以外に後にも先にも、空で言える歌は他にはない。



そんな歌であるが、実は昨日、東京で研修を受けた際、講師の先生の話の中に「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」が出てきたのである。「苦しい時には歌が必要なんだ」と、先生自身の生い立ちや病院を立て直された沿革の話の折々に、世相を歌った歌謡曲が流れるように講演のシナリオが出来ているのである。先ず流れてきた歌が「赤い靴」であった。そして、古の歌人が土地土地で詠まれた歌が、先生の口から滑らかに出て来るのである。

先生は「病院の立て直しは、まず人心から」と言われていたが、エビデンスによってのみ行動される医療人たちを、先生自身の人間味を前面に出されながら、まずは人材育成に傾注されたのだろう。そして、先生に惹きつけられた全職員が一丸となり、エビデンスに基づく確かな目標に向かっていく自律した病院を作られたのだろうと思った。

病院には、医師・看護師・技師・事務・その他の職がある。今から20年近くも前になるが、当時の榛村純一市長が「病院には五族がいて、一族は一体となり、五属が協和しなければ病院はうまくいかない」と、事あるごとに職員に言って聞かせ、病院経営に気を配られていたことが思い出される。榛村市長も文学的な方で、西行法師のこの歌も私たちによく聴かせたものである。西島先生は、まさに一族一体・五族協和で病院を立て直されたのだろう。1時間半、西島先生の熱い人間模様を拝見しながら、何か縁のようなものを感じてしまった。

2011年6月6日(月)

森林こそ日本が誇る再生可能エネルギー

6月5日は世界環境デー。昨日の毎日新聞は、この日にちなみ、東日本大震災の教訓を生かした我が国が取り組むべきエネルギー政策、そして私たち国民も生活を見直すときであると、5ページを要して大規模な特集が掲載されていた。

私たち時ノ寿の森クラブは、すでに5年前から、身近なふるさとの森林の荒廃を国民総参加によって再生させ、豊かな



森を次代を担う子どもたちに引き継ぐことが、今最も大切なことだと訴えてきた。そして、具体的な行動として静岡県掛川市倉真地区の山間地で、この5年間に民有林60haを間伐し、また間伐の跡地には土地本来の広葉樹の苗木1万本を植樹した。さらに、高温多湿な日本の気候風土に最も適した、現代風に言い換えれば環境に最も配慮したエコ住宅は「伝統的木造構法」であるということを普及してきた。

この機会に、「時ノ寿の森クラブ」が推奨している「森林と共生する文化」を実体験、また実践してみてもらいたい。

そのことは、掛川市ホームページの「寸感ホットページ」にも寄稿しているので、ぜひご覧いただきたい。

2011年6月20日(月)

いのちの鼓動

昨日も朝から梅雨らしい天候でしたが、森林NPOの定例活動日でした。降水確率も50%で、朝から小雨が降っていましたが、先週日曜日にNPO法人通常総会も終了し、いよいよ今年度の森林ボランティアの本格活動の初日ということもあり、張り切って活動拠点の山間地に向かいました。

途中、4月30日・第3回いのちの森づくり植樹祭で1000本の広葉樹の苗木



を植え込んだ里山に立ち寄ってみました。アカガシ・シラカシ・タブノキ・ヤブツバキ・ヤマボウシ・ヒメユズリハなど23種類の広葉樹の苗木は、ほぼ100%見事に根つき、

梅雨の滴を葉っぱに輝かせていました。まさに「いのちの森」の1000個の小さな鼓動が聞こえてくるようでした。

仕事に疲れたり、人間関係で悩んだりなど意気消沈したときには、静岡県掛川市倉真地内の「いのちの森」で、いのちの鼓動を肌で感じてください。きっと、元気と勇気が湧いてきますよ。

2011年6月22日(水)

組織は人心

政治の混迷ぶりには目を覆いたくなる。東日本大震災の被災者のみなさんの自立に向けた懸命な努力の姿が報道される中で、国会最終日に70日の会期延長が可決されたが、何人の国会議員が被災地の復興を真剣に考えて会期延長に賛成したのだろうか。お遍路を歩かれた菅総理も、あれから7年も経ってしまったので、邪心が判断力をむしばんでいるような気がしてならない。



最近、仕事上でも、マネジメントの基本の「き」とは、人心をつぶさに掌握し、人心を自律的に希望や使命に燃えさせることであると実感しながらも、それが容易なことではないということを味わっている。

そして、先日も、NPO法人通常総会での記念講演会で、講師の田中淳夫さんが、NPO組織の一般的なたどる道として次のようなことを言われた。初年度は組織を立ち上げて活動を模索し、2年目は活動が軌道に乗り、3年目は意見の相違や人間関係の問題が出て来る。4年目には分裂や脱退、解散が起こり、5～7年目はぎくしゃくしながら、8～10年目になると落ち着き地域に根差す。と・・・。

田中さんは、NPOが目的に向かって持続して行くことは簡単ではないということをお話してくれたのだろう。初心を忘れずに、かつ謙虚に、しかし情熱と夢はいつも忘れずに、目的に向かって立ち止まらず歩いて行こう。

2011年6月23日(木)

政治家よ！被災地の子どもたちに恥ずかしくないか！

東日本大震災の被災地の子どもたち80名が書き綴った作文を、今晚のNHK・TVが紹介していた。3・11の生々しい惨状を思い出し、目の前の光景やその時に感じた不安・恐怖・悲しい気持ちなどが、淡々と克明に綴られている。

1人のフリージャーナリストが、被災地の多くの子どもたちや保護者のみなさんに出会い、趣旨に賛同して無理しないで書くことのできる子どもたちから



集めた作文だと解説されていた。津波から逃げようと懸命に泳いでいる人が目の前で力尽きて溺れてしまった光景を、しっかりと見つめていた小学校6年の少年。社会人野球で活躍した父親と一緒に野球選手をめざしていながら、父を津波で失ってしまった若干小学3年の少年が「楽天イーグルスに入って父を超えるような選手になりたい」と、つらさをばねにしている。考古学者をめざすという小学6年の少女は、行方不明の母を思う悲しみを横に、食欲をなくしてしまっている父親を思い、3・11以降はテレビゲームにはしゃぎながらも、作文の最後には母が見つかって3人で仲良く暮らしていきたいと強い願いを少し大きな文字で書いている。また、大好きだった母と離れ離れになり、安否を気遣いながら不安な避難所生活を送り、3日目に無事な母と再会できて、「そのとき、僕は泣いてしまった」と書いている小学6年の少年は、作文の最後に、自分たちを支援してくれた自衛官や警察官たちに恩返しができるように、「やさしく、たくましい大人になりたい」と書いている。

まだ10～12歳の子どもたちが、あれほど過酷な状況に置かれた記憶を思い出し、真実をしっかりと捉えるとともに自らの生きる道を見失うことなく、けなげなまでに親や支えてくれた多くの人々への感謝の気持ちを忘れていないのである。子どもたちの感性に富み、かつ優しさとたくましさに溢れた作文に感動してしまった。

それに引き換え、我が国の政治家たちのていたらくには、目を覆うばかりで、あきれ果てて言葉も出ない。

30年以上も前に計画されて総事業費12兆円とも言われる第二東名高速・名神高速道路事業だが、すでにここまで出来上がってしまっている。写真は、静岡県掛川市地内。

2011年6月24日(金)

NPOと寄付

NPO法人とは無償でボランティア活動をする団体だと思っている人が、わが国にはまだ大勢いる。とんでもないことである。社会にとって大事な目的を達成するための活動は、まさに純粋な労働である。企業がビジネスとして事業化できないような活動を、NPO法人は使命感を持った会員の無償の汗によって成り立たせている。しかし、この活動を長く持続させていくためには、会員の無償の汗に対して実費弁償をしてやるのが重要だと、この5年間の活動を率いて痛感している。



このようなNPO法人の活動を支えるのが、広い社会の理解者からの寄付である。米国では、NPO法人と寄付の関係が国民にも良く理解されているようだ。NPO法人も、自分たちの活動を社会に明確にアピールする一方、寄付によってどのような活動が実施されたかの報告が詳細にしているようである。

日本もこのような社会になってもらいたいと願っていたが、ようやくその方向へ動き出した。わがNPO法人時ノ寿の森クラブも、寄附してくれたら人に税制優遇措置が与えられる「認定NPO法人」になりたいと思う。そのためには、100人の人から年間3000円以上の寄付を集めなければいけない。いろいろ策を考えてみようと思う。

2011年6月30日(木)

歴史的な半年に思う

まだ6月というのに、もう日差しは真夏です。各地で35℃を超える猛暑が続いており、6月としては観測上も記録的のようです。さらに今年は電力不足が加わり、これから本格的な夏を迎え、約3ヶ月間は暑さとの戦いを覚悟しなければなりません。

半年間があつという間に過ぎたかと思う反面、3月11日に東日本を襲



った大震災から、日本の社会は異次元にタイムスリップしたかの錯覚すら起こすほど、信じられない状況が続いています。被災地の皆様の心情に比べれば、私たちの不都合や不安などは大したことではないと言われてしまいますが、この半年間の出来ごとは、日本国民にとって忘れることのできない、いや忘れてはいけない歴史上の史実を体験したと言えます。多くの人が、この半年間に得た教訓や感じたり、考えたことに基づき、これから一歩ずつ活動や実践を始めてみていただきたいと思います。

今晚、ある機関紙に目を通していたら、元掛川市長・大日本報徳社社長榛村純一氏が寄稿された「災害国日本と二宮金次郎」というエッセイが掲載されていました。エッセイの中で「日本は、政府の借金が900兆円にもなり、超高齢化と人口減少で不景気に陥った所へ、この度の大震災と原発大事故に襲われました。政局の混乱も続き、この国はどうなってしまうのでしょうかと、よく聞かれます。私の答えは『日本人が二宮金次郎の姿を忘れなければ大丈夫、忘れたら危ない』というものです。」と氏は言われていました。